

看護基礎教育における地域看護実習の検討 —実習記録による分析—

小野ツルコ 太田武夫 前田真紀子 高畑晴美

要 約

地域看護実習は、地域における看護の役割を理解することを主なねらいとして、保健所で実習を行っているが、保健所実習が地域看護実習の目標を達成しているか否かを、学生の実習記録を分析し検討した。

80%以上の学生が体験している実習内容は、家庭訪問、集団検診、共同作業所、健康相談等である。実習目標の記載状況は「実習項目別実習記録」及び実習全体のまとめ「総括」の記載内容から抽出し分析した。

目標記載率70%以上あった実習項目は、実習目標①（地域の人々の生活及び健康問題の理解）は共同作業所、グループ指導、家庭訪問であり、目標②（保健サービスの実態の理解）では家庭訪問であった。また「総括」では目標②の記載率が高く、目標③（地域の看護活動の実態を学ぶ）の記載率は67%と予測に反して高くなかった。

今後地域看護、継続看護に関する講義のあり方を含めて、地域看護実習の位置づけを再検討する必要がある。

キーワード：地域看護実習、保健所実習、実習目標、看護基礎教育課程

はじめに

平成2年に看護婦等学校養成所指定規則の教育課程が改正され、これにより看護婦教育課程のなかの保健所実習の規定がなくなった。それに変わるものとして、看護婦養成所の運営に関する教育実施上の留意事項として、保健、福祉との連携並びに継続看護を理解させるため「臨床実習」の場として、保健所、保育所、乳幼児施設、母子健康センター、学校、事業所及び社会福祉施設等を適宜含めることが望ましいことが規定された。

このことは看護の視点が、従来の健康障害者の看護から、健康者も含めた看護へシフトした結果であるといえる。すなわち看護の概念の拡大とともに、対象者を地域で生活している人間を前提にした構えに変化させたことを意味している。

当校では、カリキュラム改正前から地域看護実習は45時間（1週間）を岡山県下の保健所において実習を行っており、カリキュラム改正後も同じように継続している。この地域看護実習の目的は、「地域社会の人々の健康状態、生活のしかた、生活環境を観察すると共に、地域保健の仕組みを学び、健康のあらゆるレベルの人々に対して果たす看護の役割を考える能力を学習する」²⁾³⁾ことであり、更に実習目標を表1のようにあげている。しかし、高齢化社会の到来に向けて、地域における保健・福祉体制の再編成が行われているなか、改正カリキュラムのねらいとする継続看護の学習が、保健所の実習で十分かどうか再検討することが必要となってきた。

そこで基礎看護教育課程における地域看護実習

表1 地域看護実習の目標

- | |
|---------------------------------------|
| ① 地域の人々の健康状況、生活のしかた生活環境を理解する。 |
| ② 地域の人々への保健サービスの実態を保健所の機能を通して理解する。 |
| ③ 保健サービスの中で行われている看護活動の実態を学ぶ。 |
| ④ 保健医療関係者の施設及び従事者の役割を理解し、連絡協調の重要性を学ぶ。 |

のあり方を見直す資料として、カリキュラム改正後の地域看護実習内容が、地域看護実習の目的・目標に合致しているのかどうか、について検討したいと以下の研究を行った。

対象と方法

平成4年度（以下4期生と呼称）・5年度（以下5期生と呼称）に行った地域看護実習の、学生の実習記録の記述内容を分析対象とした。分析方法は、学生の実習記録に記載されている内容の中から、実習目標の①②③④各項に関する記載の有無を、教員3人が別々に判読した。そして読みとったもののうち、教員の2人あるいは3人が一致したものを記載ありとカウントした。なお検討材料にした実習記録は、「実習項目別実習記録」と「総括記録」である。

地域看護実習の概要

実習に行く保健所が決まるまでには、まず各看護学校が実習保健所希望調べを県（環境保健部）へ提出する。当校は希望調べを出す時点で、学生の出身地をみて県内出身者は自宅から通える保健所を、県外学生は岡山から通学可能範囲（片道1時間程度）の保健所に行けるように希望している。県の方では岡山県下22校の看護学校の希望をとりまとめて、県下17保健所1支所への学生配置計画を立てる。

実習は岡山県環境保健部監修、岡山県看護学校教務主任会編集の「岡山県看護学生保健所実習テキスト」⁹⁾に沿ってすすめられるが、学校固有の実習目的・目標も提示している。実習期間は1週間で、実習に行く前にそれぞれの保健所で、集中オ

リエンテーションが行われる。集中オリエンテーションはその保健所で実習する学生に対して、保健所全体の機能を説明するもので、4月9月の2回実施されている。

当校は前述のテキストをふまえた上に、当校の実習目的・目標を説明して、学生を20人ずつ4回に分けて保健所に出している。4期生、5期生の実習保健所、実習時期、学生数は表2、3の通りである。

表2 保健所別の実習学生数

保健所名	保健所型	4期生	5期生	計
岡山環境保健所	UR1	19人	15人	34人
西大寺地域保健所	R4	16	8	24
瀬戸地域保健所	L5	6	3	9
東備環境保健所	R5	2	6	8
玉野地域保健所	R4		2	2
倉敷環境保健所	U1	12	18	30
総社地域保健所	R4	8	10	18
倉敷西地域保健所	R4	4	3	7
井笠環境保健所	R3	9	9	18
高梁環境保健所	L5	2	1	3
阿新環境保健所	L5	2		2
津山環境保健所	R3		1	1
計		80	76	156

表3 保健所実習の実施時期

	第1回	第2回	第3回	第4回
4期生	5月18-22日	7月6-10日	9月7-11日	12月7-11日
5期生	5月17-21日	5月31-6月25日	6月21-25日	11月22-26日

結果

分析した実習記録は4期生78人(97.5%)、5期生74人(97.4%)で、保健所の型別の実習学生数をみると、半数が農村型（R型）保健所で、40%が都市型（U型）・中間型（UR型）保健所で実習を行っており、ほとんどが岡山市、倉敷市を中心とした県南部で実習をしている事になる。

保健所における実習体験項目は表4の通りで、最も多いのは家庭訪問で、4期生・5期生合わせ

表4 保健所実習における体験実習項目

	4期生(78人)	5期生(74人)	計(152人)
集団検診	75人(113回)	66人(103回)	141人(216回)
健康相談	64 (98)	48 (65)	112 (163)
家庭訪問	77 (77)	67 (67)	144 (144)
共同作業所	67 (67)	56 (56)	123 (123)
グループ指導	37 (43)	24 (24)	61 (67)
学級活動	24 (24)	27 (36)	51 (60)
衛生教育	21 (21)	26 (29)	47 (50)
地区組織	20 (20)	6 (6)	26 (26)
その他	10 (10)	20 (20)	30 (30)
1人当たり	6.1回	5.5回	5.8回

() は延べ回数

てて152人中144人(94.7%)が保健婦の家庭訪問に同行させてもらっている。家庭訪問の対象は、精神障害者(73件)、新生児訪問等小児(59件)、結核患者(17件)、要介護老人(12件)、難病等その他(5件)延べ166件である。

次に多いのが乳幼児、3才児、1才6ヶ月児等の健康診査をはじめとする住民検診など集団検診で、141人の学生が延べ216回体験している。3番目が、地域の精神障害者が作業療法として行っている作業を一緒にしながら、精神障害者の方の生活の一端にふれる共同作業所での実習である。これは123人(80.9%)が体験している。

4番目が保健所における一般又は乳幼児のクリニックであり、73.3%の学生が実習している。以下精神障害者の患者会・家族会等のグループ指導への参加、母親学級、成人病予防の為の肥満教室等継続した学級活動への参加、健康づくりを目的とした衛生教育の見学、地域の保健活動をしている愛育委員会の総会行事への参加、その他保健所管内の保健婦会、連絡会の見学等の実習をしている。

4期生と5期生間の違い、及び実習時期による大きな違いはないが、体験した1人平均の実習体験回数が4期生は6.1回であるのに対して、5期生は5.5回とやや少ない。実習時期別では5期生の11月の4回目の実習生は4.8回と少ない。また家庭訪問の体験者が4期生に比して、5期生に減少して

いることは注目したい。

実習目標の記載状況を実習項目別実習記録から見たが、実習項目別記録用紙は「実習項目」、「実習概要」、「実習場面」、「実施したこと・見学したこと」と、それらを通して「考えたこと・学習したこと」を記載できるようになっている。この中の「考えたこと・学習したこと」の中の実習目標に関連した記載の有無を読みとった。その記載状況は表5の通りである。

表5 実習項目別目標の記載状況

実習項目	目標①	目標②	目標③	目標④
集団検診N=216	120(55.6)	116(53.7)	1(0.5)	11(5.1)
健康相談N=163	68(41.7)	64(39.3)	1(0.6)	5(3.1)
家庭訪問N=144	110(76.4)	103(71.5)	8(5.6)	14(9.7)
共同作業所N=123	107(87.0)	53(43.1)	0	16(13.0)
グループ指導N=67	53(79.1)	32(47.8)	0	2(3.0)
学級活動N=60	38(63.3)	41(68.3)	1(1.7)	2(3.3)
衛生教育N=50	17(34.0)	23(46.0)	1(2.0)	0
地区組織N=26	6(23.1)	11(42.3)	0	12(46.2)
その他N=30	4(13.3)	17(56.7)	3(10.0)	12(40.0)

N=実習体験回数(%)

「地域の人々を理解する」という目標①の記載率が高いのは、共同作業所(87.0%)、グループ指導(79.1%)、家庭訪問(76.4%)であり、目標②「保健所の機能を通して保健サービスを理解する」の記載率は家庭訪問、学級活動で高い。目標③「看護活動の実態を学ぶ」は、どの実習場面でも記載率は低い。目標④「保健医療関係者との連絡協働の重要性を学ぶ」は、愛育委員会など地区組織育成(46.2%)、その他管内保健婦研究会(40.0%)等の見学や参加時の記載の中に、他の実習体験に比較して多く見られる。

実習体験者の最も多い集団検診の目標記載率は目標①が55.6%、目標②53.7%、目標④5.1%、目標③0.5%で目標③・④はほとんど記載がないに等しい。2番目に多い健康相談の目標記載率は目標①が41.7%、目標②39.3%、で集団検診よりも低い。3番目の家庭訪問の目標の記載率は目標①が76.4%、目標②71.5%で、集団検診、健康相談よりも目標①②ともに記載率が高い。

表6 総括欄の目標記載状況

	学生数	目標①	目標②	目標③	目標④
4期生	78人	45(57.7)	75(96.2)	53(67.9)	31(39.7)
5期生	74人	34(45.9)	51(68.9)	49(66.2)	20(27.0)
計	152人	79(52.0)	126(82.9)	102(67.1)	51(33.6)

人数(%)

1週間の地域看護実習の「総括記録」用紙は自由記載である。総括記録の目標記載状況は表6の通りで、目標②(保健サービスの理解)の記載率が一番高い。二番目が目標③(看護活動の実態)であり、三番目が目標①(地域の人々の理解)で、四番目が目標④(関係職種との連絡調整)である。これを実習の時期別に実習の前期と後期に分けて見ると表7の通りで、看護実習のすすんだ実習後期の方の学生が、全体に目標の記載率が高い。また実習保健所の型別にも目標記載率を見たが大きな差はなかった。

表7 前期後期別の目標記載状況

	目標1	目標2	目標3	目標4
前期N=113	54(47.8)	91(80.5)	75(66.4)	31(27.4)
後期N=39	25(64.1)	35(89.7)	27(69.2)	20(51.3)
計N=152	79(52.0)	126(82.9)	102(67.1)	51(33.6)

N=人数(%)

考 察

1) 岡山県における保健所実習の概況

看護婦養成所の教育課程改正のねらいは保健医療に対する社会のニーズに応えるものであり、ゆとりのある教育が強調されている。また高齢化社会に対応して継続看護、在宅看護にも目が向けられる事が期待されているとともに、健康教育、疾病予防、リハビリテーション、ターミナルケアなど包括医療も重視され、チーム医療が進められるような教育を志向している⁹⁾。

改正カリキュラムの地域看護学は継続看護、在宅看護を中心に個人、家族、社会の広がりの中で看護がとらえられることが求められており、これらの学習が可能であれば、地域看護実習は必ずしも保健所で行なう必要はない。すなわち継続看護、

在宅看護の学習は、それぞれの学校の自由裁量とされている。

岡山県には看護婦養成課程が24校(平成5年現在)あり、そのうち22校(約1060人)が保健所で実習を行っている。看護婦養成所が県南部に集中していることから、学校独自で実習場所を開拓しようとする、県南部で競合する事が予測され、県の調整に頼らざるを得ない。岡山県看護学校教務主任会資料によると、保健所で実習している22校の実習科目名は「保健所実習」としている学校が14校、「地域看護実習」3校、「老人・成人看護実習」2校、「基礎看護実習」1校である。

今後4年制看護教育機関の増設、新たな看護婦養成所の設置が見込まれており看護学生が増加する。一方平成5年度より岡山市が政令市になった事から、岡山市独自の保健活動が予測される。また訪問看護ステーションなど、民間の在宅ケアの活動も活発化しており、新たな保健福祉の枠組みをふまえて、将来的に地域看護実習の進め方の工夫が求められる。

2. 実習目標記載率からみた実習内容

地域看護実習が目的・目標に沿っているのか否か、またその目標からみて実習内容が妥当なものと言えるかどうかを検討した。その方法として学生の書いた実習記録の分析を試みた。

実習記録は実習の成果として記録されるものであり、強く印象づけられたものが記載される。記載内容に実習目標に関連した記録がある事は、実習目標がそれだけ意識化され、体験内容が意味をもったものとして認識された結果と解釈される。

1) 実習項目別の目標記載状況

保健所実習で多くの学生が体験している実習は集団検診、家庭訪問で、90%以上の学生が体験している。集団検診は体験者1人平均延べ1.5回で、体験している実習としては最も多いが、目標の記載率は家庭訪問の方が目標①②③④のいずれも高い。このことは集団検診よりも、家庭訪問の方が、実習内容として学生の学習意欲の強い事を表している。他県の保健所側からの保健所実習評価でも、学生のいちばん関心が高いのは、家庭訪問である

と報告されている⁶⁾。科目担当者としても、家庭訪問は継続看護を学ぶ場として、学生全員に体験して欲しい実習内容である。しかし保健所保健婦の家庭訪問回数は年毎に減少している⁷⁾⁸⁾なか、学生の家庭訪問体験率が高い事は、保健婦さんの努力の賜であろう。しかし地域保健法の制定で、住民直接サービスが市町村に移管されることから、保健所保健婦の家庭訪問はさらに減少することが推測される。学生が100%家庭訪問できる実習場が求められる。

実習目標の記載が多い実習項目を実習目標毎に見ると、目標①の記載率の高い実習は、共同作業所、グループ指導等で87%、86.9%と高率である。これは地域における精神障害者の作業療法や、精神障害者の患者会、家族会への参加であり、精神障害者の社会復帰の困難さや、生活実態の厳しさが、学生達に強いインパクトを与えている事が伺える。

愛育委員会等の地区組織に関連した会合や催し、管内保健婦研究会の参加等の実習は、目標④の関係職種との連携、調整に関するものの記載率が高い。そこでは学生はほとんどオブザーバー的に参加し、話し合いの内容や、討論の成りゆきを見ているだけであると思われるが、保健活動が多くの職種の人の関わりによって、運営されていることを学習しているようである。

目標③の保健サービスの中で行われている看護活動の実態に関する記載はどの実習項目も低い。これは保健所事業として行事に参加する事になるので、保健活動やそれを利用する一般の人々の方に注意が向けられ、保健婦活動に関心が向いていないか、あるいは看護職としてその一部にとけ込んでいるからではないかと考えられる。いずれにしても地域看護の役割、意義が十分理解されていないことは問題である。

2) 実習総括の目標記載状況

1週間の実習のまとめとして総括を書いているが、この中で最も記載率が高いのは、目標②の保健サービスの実態の理解である。家庭訪問に始まり、対象別の集団検診、保健所内外の健康相談、グループ指導、学級活動、脳卒中後遺症のリハビリ

訓練、健康増進車による衛生教育など、新生児から、精神障害者、難病患者、老人まで、幅広い対象に対する多様な対人保健サービス事業に参加することによって、多くのことを学んでいる。そして、一般の人の健康への関心の浅いこと、保健サービスの地味さなど、医療機関とは異なる保健所の機能に注目している。

しかし最も学習して欲しい目標③の「看護活動の実態を学ぶ」が4期生、5期生ともに低い(67.9%、66.2%)ことは、地域実習で学んで欲しい継続看護の重要性が、十分動機づけされていないと反省させられる。当校では地域看護学あるいは継続看護としての講義はまとめて行っておらず、これらの講義は、公衆衛生、看護概論、成人看護学総論、母性看護学総論、小児看護学総論、老人看護学総論等、それぞれの担当教官に依存している。

実習前に学生が地域看護や、継続看護をどのように理解しているか把握していないが、学生はそれぞれの講義で学んだ地域看護、継続看護、保健の知識を保健所の実習を通して統合することになる。地域看護に関する目標記載率の低さは基礎的知識の不足に由来しているのではないかと考えられる。今後は地域看護学として科目の開講が必要であろう。

目標④の関係職種との連絡調整を学ぶは、全体に記載率が低い。後期に実習した学生は前期に実習した学生に比較して記載が多い。これは看護実習の進行と共に、また看護特論など授業の成果として、問題意識が深くなったものと解釈される。

3. 基礎看護教育課程における地域看護実習

当校における地域看護実習は、保健所における保健活動を通して、地域の人々を対象にした看護の役割を学習する事をねらいにしている。しかし学生の保健所活動に対する認識は薄く、保健所オリエンテーションの感想文には、ほとんどの学生が保健所とは野犬狩りを行う所と思っていたが、実に多くの仕事をしている事を知って驚いたと書いている。これは公衆衛生や保健に関する授業を受けているのに、その知識と保健所のもつ機能が

結びついていないことを意味している。

また実習記録の中の目標①②に関する内容の記載率の高さから、学生の関心は域看護実習のねらいとする看護の継続性の認識よりも、保健サービスの実態や、地域で生活している人々の理解に向けられており、まずは保健所の対人サービスをはじめ、環境保健も含めて、人々の健康支援システム等を学ぶことが出来ていることは一つの成果と言えよう。

しかし高齢化社会を迎えて、地域看護の量と質の需要の増大が予測されているところから、地域看護実習の目標を、地域の人々の健康問題や保健活動の理解に留まらせてはいけない。基礎看護教育として施設中心ではなく、人間に適応させるような、病气中心よりも健康を強調するような教育を主眼⁹⁾とすることが必要である。

地域看護の必要性が指摘されながら、改正カリキュラムでは地域看護学を独立させていない。これは松野が看護基礎教育課程に地域看護を専攻する教員の少ないことを指摘しているように¹⁰⁾、改正カリキュラムで地域看護学が立てられなかったのは、地域看護学を教授する専門家の不足、あるいは実習場所の未開拓など諸般の事情によるのではないかと考えられる。

すでに基礎看護教育課程のいくつかの学校は、カリキュラム改正前から地域看護学教育に意欲的に取り組んでいる¹¹⁾⁻¹⁴⁾。

これらの学校はいずれも保健所における実習の他に、独自の実習の場を開拓し、入院患者の退院後の家庭訪問、医療施設外での実践能力の基礎づくり、寝たきり老人の訪問、自宅療養患者の訪問看護を行っている。

ともあれ地域看護学は学校の自由裁量に任せられているが、地域看護、継続看護に対する基本的考え方は、学校としての教育方針に関わってくる。当校の地域看護実習は従来の実習の枠を越えておらず、継続看護、地域看護実習として検討の余地がある。まずは講義の位置づけを明確にし、地域看護に対する問題意識を喚起すること、そして実習目的目標を再検討し、可能な限り実習場所の開拓が課題である。

ま と め

保健所で行っている地域看護実習の実習記録を分析して、実習内容について検討した。その結果以下のことが了解された。

- 1) 学生が体験している実習項目は家庭訪問、集団検診、共同作業所、健康相談、学級活動等である。
- 2) 目標①「地域の人々の理解」の目標記載率の高い実習項目は、共同作業所、グループ指導、家庭訪問であり、目標②「保健サービスの理解」の記載率の高いのは家庭訪問である。
- 3) 集団検診は体験頻度が他の実習項目に比して多い割には、目標記載率が全体に低い。
- 4) 実習総括における実習目標の記載率の高いのは目標②であり、「地域看護の役割を学ぶ」目標③の記載率は予想に反して67%とそれほど高くなかった。

文 献

- 1) 厚生省健康政策局看護課(編)：看護教育カリキュラム—21世紀に期待される看護職者のために。第一出版法規KK, 東京, 137, 1989
- 2) 岡山大学医療技術短期大学部：看護実習の手引き。平成4年度(1992年)26
- 3) 岡山大学医療技術短期大学部：看護実習の手引き。平成5年度(1993年)26
- 4) 岡山県環境保健部環境保健課(監), 岡山県看護学校教務主任会(編)：岡山県看護学生保健所実習テキスト。1992年度
- 5) 青木康子, 伊須田栄子両氏に聞く:新しい看護婦教育カリキュラム。看護教育30:322-343, 1989.
- 6) 山田悦子, 千葉真弓, 篠原浄：看護学生の保健所実習についての考察。第17回日本看護学会看護教育82-84, 1986.
- 7) 厚生統計協会：国民衛生の動向, 厚生の指標39:18, 1992.
- 8) 厚生統計協会：国民衛生の動向, 厚生の指標40:18, 1993.
- 9) 松野かほる：わが国における地域看護の現状と今後の方向。看護教育29:326-333, 1988.
- 10) 松野かほる：看護教育に求めるもの 国試の改善とカリキュラムの方向。看護教育30:373-377, 1989.
- 11) 西村真実子, 金川克子：継続看護実習の学習効果と実習方法の妥当性の検討。第15回日本看護学会集録看護教育41-45, 1984.
- 12) 矢本美子, 松本比佐江, 川西千恵美, 川畑摩紀枝, 祖父江育子, 河井泉, 野崎香野：施設外での実践能力向

- 上を目標とした地域看護学教育の現状。看護教育29：334-339, 1988.
- 13) 鈴木美江子：弘前大学医療技術短大における地域看護学実習の展開。看護教育29：340-349, 1988.
- 14) 大竹芳子：訪問看護を中心とした地域看護学教育の展開。看護教育29：350-356, 1988.

A Study of community nursing
Practice of basic nursing education curriculum
— Analysis of practice report by student nurses —

Tsuruko ONO, Takeo OHTA, Makiko MAEDA, Harumi TAKABATAKE

Abstract

Practice reports at the health center for 1 week written by 152 student nurses were analysed to know whether they achieved their goal of the course for community nursing or not. More than 80% students attended at home visits, mass health examination, common workshops for mentally disordered persons and health counselling.

Practice for understanding peoples' lives and health problems in the community were well achieved in practice at the common workshop, group guidance and home visit. They understood about health care and services in the community through home visits.

Their comprehension of role of the community nursing was not so sufficient as expected for mark of curriculum.

Key words: community nursing practice, practice at public health center,
goal of the course for community nursing, basic nursing education curriculum

School of Health Sciences Okayama University